
月影狂想曲

二十日子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月影狂想曲

【Nコード】

N7529U

【作者名】

二十日子

【あらすじ】

人と魔物の境界が曖昧な世界。人外の力持つものは亜人と呼ばれ、弱い者は虐げられ強い者は恐れられていた。人の亜人に対する反応はこの二極であり、少女もまた虐げられる立場にあった。そんな世界で、彼女は喪失と共に歩み出す。己の道を。

魔物の成り損ない(前書き)

残酷描写がどんどん投入されます。因みにバッドエンド系ですので
苦手な方は回避お願いします。

魔物の成り損ない

「裏切ったな！」怒りに体が震え、悲鳴とも怒声ともつかない叫び声が全身からほとばしる。

そう叫ぶ間にも抱きしめている少女の体は冷たくなっていく。すでに少女から心臓の鼓動は聞こえない、魂も失われた。

黒髪黒目の少女は燃えるような朱色の少女を抱いてる為に、身動きが取れず吠えていた。

信頼していた友に向かって。

「フラメルは言っていた、生きたいと。力に引きずられず、強くありたいと私に言ったんだ。」一粒の涙が黒瞳から流れ少女は吠え続ける。

「しょうがない。」気弱な声が応えた。青年は右手に赤く光る宝石を持っていた。フラメルの魂、炎の力が詰まった結晶。

「そいつは結局魔物の成り損ないだ。それならちゃんと有効活用した方がいい。」見慣れた笑みを浮かべて青年は話す。親しく名を呼び合った彼女を、魔物の成り損ないと言って。

魔物の成り損ない(後書き)

更新は何時止まるか分からないです(汗)
それでもよければお付き合いお願いします。

亜人

何時から見誤まった。彼は私達を人間と変わらぬ風に友として振る舞った。最初は本当に、けれど今は思い出に変わった。

砕けた、粉々に。友情なんてありはしない。亜人と人は違うのだ。

「勝手なことをいうな。魔物でも人でもそれはフラメルが決めたこと。お前はそれを・・・」悔しさと哀しみに心は狂ったように渦巻く。けれど、世の人間の大半はこの男と同じ認識である。

魔物の成り損ないが私達亜人、俗にハンブンという蔑称で呼ばれる。大概何らかの能力を持ち、攻撃性のある性格をしている。感情の制御ができず、すぐに問題を起こす厄介物。人とは呼ばれない、弱い者は家畜以下の奴隷のように扱われる。

私達のように

「どうせ、あと一月もしたらフラメルは死ぬはずだった。それなら魔力が取れる内に取っておいた方がいいだろう。」青年は当然のように言う。

魔力か、フラメルの結晶はきつと高く売れる。己と戦い消滅する道を選んだフラメルの魂。魔物になるのではなく自らを失う事を受け入れた。怒りが目の前を暗くする。

腕に激しい熱を感じた。フラメルの体から火がちろちろと生まれている。少女はフラメルの体をそつと地面に横たえた。やがて炎に巻かれ、焦げる臭いもなく純粹な火となってフラメルの姿が燃えていく。

青年も少女もその炎が大気に消えるまで、魅入られたようにその場から動かなかつた。

喪失

ポツカリと空いた胸の穴に、感情が吸い込まれて体が麻痺する。先に動いたのは青年だった。

「じゃあな、ウル。」青年は手に持っていた結晶を腰の袋にしまおうとした。晴れ空に座す太陽に、それはキラリと赤い光を反射した。体を反らし青年はこの場から立ち去ろうとしていた。

耳に蘇る声

「もしも・・・、もしも私が死んで結晶になったら・・・。ウル、貴方に持っていて欲しい。」優しく笑うフラメルの顔。

彼女の証、約束が意識を地面に縫い付ける。汚い手で触るな。それは誰の物でもない。

歯を食いしばり、全力で駆け出す。背を向けていたライノの体に体重を掛けて体当たりを喰らわす。

寸前で気付いたライノの顔が、驚愕に見開かれる。「グッ」くぐもった声と共に二人の体が地面に転がった。

ウルは肩を打ち付け、痛みに顔を歪めて立ち上がった。青年も続いて立ち上がるうとしたが、少女はその背に勢いを付けて片足をのせ押さえつけた。素早く腰の袋を探り、ほのかに熱を発する結晶を掴

み出す。

「さよならだライノ。」殺してしまいたい。しかし、簡単に割り切る事などできない。昨日まで友達面していた奴を、ライノのが彼女にしたように致命傷を与えるなど、弱いウルには無理だった。身体的にも、心も追い付かない。

バツと跳ねるように駆け出す。青年の動きは鈍い。森の中へ、村人が恐れ近付かない奥深くへ。人を傷付けた以上身の安全はない。この村は比較的亜人に好意的だった。フラメルと二人村近くの森に住み着いてから、少なくとも交流があった。それも終わり。所詮は亜人、噛みついた野犬は処分される。

「ウル！！」振り返ると漸くライノは立ち上がった所だった。怒りに顔が赤くなり彼女を睨みつけている。最初に会った時、彼は泣いていた。森で道に迷い、わんわんと泣き声を響かせて何時野獣に襲われるか分からなかった。フラメルと私は驚き、彼に声をかけた。ライノは私達を見て安心したのか無邪気に笑った。もう五年も前、
・ 遠い。フラメルの体に矢が刺さり、光を放つと結晶がコロんとフラメルの足元に落ちた。魔力の込められた矢に魂が絡め取られたのだ。ライノは無表情にそれを拾った。裏切ったと感じるウルが愚かなのだ。

風の噂に聞く亜人狩りは度々聞いていた。金になるのだ、中途半端な私達は。弱く手頃に狩れて、文句を言う者はいない。

あてもなく、ウルは森の中を走る。何もかも失った。それでも生きなければならない。

「フラメル……、私は行くよ。アナタの分まで私は行く。」何処へ？……分からない。それでも足に力が籠る。薄暗い森がウルを隠した。

ウルのカ(前書き)

ライオンキングに出てくる昆虫って美味しそうですよ。しかし、
苦手な方は鳥肌ものですから一応です。

グロ注意

ウルのカ

夜が空に帳を下ろす。それと共にウルが白光を放ち始めた。月に似た柔らかな光がその身を包む。彼女が親に捨てられた原因がこれだ。呪いであり祝福でもある。髪や目、肌にコーティングするように光が纏わり付いた。住み慣れた森から遠く離れ、獣道を辿りウルは森林をさまよう。

実は彼女の体から放たれる光は昼夜問わず発せられている。昼の間は太陽の光が強く目立たないだけだ。そのお陰で魔物も獣も恐れる必要がなかった。この光に魔物と獣は敏感で下手な行動を取らなければ、敵意をもって襲われることはまずなかった。

わずか6才で山に捨てられ、フラメルに会うまでの3年間を無事に過ごせたのはこの力があつたからだ。狼の群れが横を通り過ぎていく。

ウルを草木同然に扱い、何の反応もみせない。これは意図的にそうしているのだ。ウルもまた、狼を意識していないように装う。

時折獣の遠吠えが聞こえてくる。腹が空いたウルは、石や倒木を動かして隠れていた虫を捕まえた。それから倒木の上に座り、身をくねらせる白い幼虫をパクリと口に入れた。泥の臭いと甘い味が口腔に広がる。慣れ親しんだ食事だ。

眠気を感じた。目星をつけていた枯木の虚に入り、身を横たえる。目を閉じて、人里に行くかこのまま暫く森に住むか考えていた。体

を動かすのを止めると、急激に体温が冷える。少し震えて体を丸めた。寂しいと感じた。同じ亜人を探してみようか。・・・それがいいと結論を出す。ウルは眠った。

未明、獣の荒々しい吠え声にウルは叩き起こされた。尋常な声ではない。ウルはそつと音を立てないように身を起こす。争いに巻き込まれないようその場から逃げ出そうとした。

「ウオオオオ！」体が固まる。獣の声ではない。言語に近い声だ。人？或は同類か。ウルは迷う。誰がこんな奥深い森の中にいるのか、不用意な行動は身を危険にさらす。逃げるべきだ。でも同類なら？

あれから7日間人に会ってなかった。それが想像していたよりもウルの心を苦しめていた。

そつと、声のした方に体を向ける。ウルは駆け出した。

そこは木がまばらに生えた、開けた場所になっていた。黒ずんだ毛を持つ、剣を構えた亜人と覚しき男と、真つ黒な毛の虎に似た生き物が互いに隙を窺っていた。どちらも血を流してぎらぎらと目を光らせている。ガサツと音が立った。ウルが姿を現すと、2対の視線が彼女を射抜いた。

ウルを見た黒い獣が戸惑いの唸り声を上げる。その隙を亜人の男は突こうとした。「やめろ！」気がつけば口が開いていた。黒い獣は

魔物だ。きつと元亜人だ。声に動きを止めた亜人は、血走った目でウルを睨んだ。明らかな敵意。ウルは睨み返した。ウルの間う光に戦意を削がれ、黒い獣が後退する。深手は負ってないらしく、身を翻すとウルの間うを通り森の中へ跳躍して消えた。

傭兵

「何が目的だ。」男がウルに剣を向ける。顔は人と狼を混ぜたような容貌をしている。聞かれてウルは困る。人恋しさに少し様子を見ようとしただけだった。けれど、亜人と魔物が争う姿に我慢ができず飛び出してしまった。

「いや、別にあんたに用はない。」ウル of 答えに男が目を細める。「ほう、なら何故邪魔をした。」声には怒気が感じられた。「殺す必要があったのか？」もしそうなら、余計な事をしたとウルは後悔していた。自分が部外者であることは自覚している。どちらが死んでも本来ウルには関係なかった。それをウルが姿を見せることで、戦いを無理矢理止めたのだ。ウル of 光に魔物の敵意が削がれる事を知っていて。しかし、あっさりと獣が身を引いた事で望んだ戦いはなかったことが分かる。少なくとも魔物の方は。

「・・・、いや。」ウル of 言葉に、やや間を置いて男は応える。それから剣の血を払い、鞘に収めてからウルの方へ歩み寄った。

「旅人か？」男の背はウルより頭2つ分高かった。「まあ、そんなるかな。」応えながら、ウルは男の否定に安堵した。「俺は傭兵をしている。さっきの獣を追い払ったのはアンタの力か？」男が強面の顔でウルを見下ろす。好奇の色が青い瞳に浮かんでいた。

「半分は私の力かもしれない。けど、退いたのはあの獣の意志だ。」ウルは正直に答える。それを聞いて男は眉を寄せた。どうやら獣を操ったように見えたらしい。疑っている表情をしていたが、そうかと頷き納得してみせた。

「連れはいないのか。」男の言葉にぎくりとする。

「死んだ。」ウルの声は平坦に響いた。

「悪いことを聞いたな。」義務的な口調で男が言う。

「いえ。」空が白み始めている。ウルは頭を下げその場から離れようとした。

「待て。」男はウルを呼び止める。「アンタは獣に襲われないのか？」男はウルが大した武器を身に纏っていないことから、半ば確信して聞いた。

「ある程度は。」ウルは律儀に答える。

「俺は次の目的地を決めていない。暫くアンタと行動を共にしたいが・・・いいか？」亜人同士の気安さと、断られても構わないといった男の態度にウルは考える。血の臭いのするこの男に、彼女は常に気を張りつめていた。

「私は襲われなくても、アナタに対して獣が襲わないという保障はない。」ウルは男の期待することに釘を刺した。

「ああ、それでも構わん。」男は少々疲労が溜まっていた。旅は慣れたものであったが、道に迷ったことで一人で行動する期間が長引きすぎた。少女は弱そうには見えるが、始終気を張るよりはマシだと判断した。亜人を見掛けで推断してはならない。お互いが信用していないことは分かっている。何しろ会ったばかりで、何時別れる

かも分からない。

「それではしばらく。」ウルが男に向き直る。「よろしくな。」男が初めて笑みを浮かべた。鋭い犬歯が口から覗き、ニヤツとする。この男の笑った顔は狼そのものだ。ウルは不安を半分に、連れができたことを喜び笑みを返した。

旅程

森から出て街道に出た。地面が踏み固められていて、馬車も通れそうな道だ。ウルは最初渋っていたが、傭兵の男にいわれてしょうがなく道に出る。

「アンタはもっと人に慣れた方がいい。」男の方はやっと見慣れた道に出てほっと息をついていた。それとは対照的にウルはキョロキョロと辺りを警戒していた。

「ガナクスは人が恐くないか？」ウルは男に聞く。これまで会った亜人は、皆人間を避けていた。ウルもフラメルをあんな形で失ったことで、見知らぬ人間に会ったらどんな対応をすればいいかわからなかった。いつか大きな街に行きたいとは考えていたが、もっと先のことだと無意識に決めていた。

「そんなこと言ったら、世渡りなんぞできんだろっが。」
ガナクスが呆れたようだ。彼は亜人の中でも力持つ者なのだろう。彼の態度、仕事の話からもそれは分かっていた。無駄な事を聞いてしまったようだ。

「この道は何処に続いているんだ？」ウルが歩いている方角を指した。ガナクスは何度目か分からない溜息をつく。ウルが世間知らずだというのが、会話のズレから知れる。殆ど喋るのがガナクスで、その内容にウルが突っ込んでくる。一般常識がこの少女には皆無だった。

「真つ直ぐ行くと、カナルに着く。物流の多い街だが、治安がよくない。」ウルは難しい顔をした。ウルとしてはそんな場所に近付きたくない。その筋の人間に彼女は絶好の獲物だろう。

「ガナクス、短い付き合いだった。」ウルは唐突に別れを告げる。ガナクスは苦い顔をした。

「行く当てはあるのか？」そんなものが無いことなど見抜くまでもなかった。

「いいや。」ウルは何も考えずに返す。

「アンタはそれでもいいのか？」続けてウルを引き留めるようガナクスは言葉を掛けた。

彼はウルに興味を持っていた。亜人の持つ力は様々だ。ウルの方は使いようによつては、役立ちそうだと打算も働く。出会ってからそう間もないが、彼女は遭遇する獣や魔物を一瞥することなく森を歩いていた。獣の方も警戒することなく二人の傍らを通り過ぎて行った。ガナクスの方をちらりとみる奴もいたが大概無視される。たった二日で有り得ない数の獣と遭遇した。ウルはそれが当たり前だと考えているようだが、亜人であるガナクスにも異常に思えた。

「私には金もない、アナタのような力もない。街に行つたつて、ろくな事がないよ。」確かにそうだろう。世間ずれしていても、考える頭をウルは持っている。ガナクスはそれに一つの提案をする。

「俺の仕事を手伝え。それなりの働きができたら報酬もやるわ。」ガナクスはニヤリとしてウルに言った。多分断らないだろう。

「私に何が出来るんだ？」ウルが怪訝な顔をする。ガナクスはその

背を促した。「道すがら話そう。」二人は街の方角へ歩き出した。

旅程（後書き）

ガナクスが亜人という事もあってウルは無防備ですね。しかし、ガナクスが当初考えていたよりお人好しに見える。

旅程 2

街道を進むほどに道が広くなっていく。それと共に木がまばらになり、青い田畑が視界を埋めた。

「俺の仕事の殆どは護衛だ。商人の運ぶ荷や、依頼人の身辺警護、たまに罪人の見張りなんかをやっている。」ガナクスが丁寧に仕事の内容を説明していく。ウルは素直に耳を傾けていた。

「何も討伐とか戦とか、血生臭いことはあまりしない。進んでする命のやり取りなんざ、そこらの気の短い奴しかやらんからな。だからアンタには期待してるぜ。」なにしろ天然の魔物避けになるんだからな・・・ガナクスはウルを過信する。それもわざと、意識的にだ。

「この仕事は魔物や賊に襲われる確率が高い。だからアンタにその魔物の方を追い散らしてもらおう。」ガナクスの見下ろす目は鋭い。大人しく聞いていたウルはぎょっとその目を見上げ、口を開く。

「できるわけがない、魔物を退けるなんて。私にはせいぜい彼らを避けることしかできない。」ガナクスはふんつと鼻を鳴らす。避ける？いいや、あれは避けているとは言いがたい。山中の光景を思い浮かべ、ガナクスはウルの目の動きを観察した。

「本当に出来ないのか？」ひたと目を合わせられたウルは、考えるようにガナクスから視線を少しずらした。

確信はない。けれど頭の何処かで可能だと声がする。ウルが彼等を

避けるように、彼等はウルを避ける。しかし、それとこれとではやはり違うのではないか。

「無理だ。」ウルはきっぱりと言ったつもりだったが、口から出た声は弱い。

「なぜ試そうとしない？ やってみなければ己の力を知ることにはできない。」ウルの間を逃がさないようガナクスが問う。人に馴れぬこの亜人の少女は、敢えて出来ないと言った。深く考えての事ではないだろうが、それをガナクスは断ち切った。

「アンタがそう言うならこの話はなかったことにしてもいい。だが、人」の世を渡するには力が必要だ。アンタはそれを簡単に否定していいのかわ。ウルは黙って考える。ガナクスは返事を返さないウルに、怒ることなく並んで歩く。ガナクスは、暫くの間はウルを手放すつもりはなかった。好奇心が満たされるまでは傍に置くつもりだ。身勝手だがこれはウルにとっても悪い申し出ではない。試すことは決して無駄にはならないからだ。「人」の世に触れる事、自らの力を知る事……。

明確な答えを出せないまま、ウルは歩く。ふと、足の裏に硬い感触を感じた。道が舗装された石畳になっていた。露店商が何人か道の端に風呂敷を広げ、民家がまばらに並ぶ。

街が段々と近付いていた。

旅程2（後書き）

次回、街に入ります。

街

街道に、数を増した人や馬が行き交う。その道の先には、いまだに見えぬ街を囲む壁が、門を一つ開いていた。そこに人が群れ、言葉として聞き取れないざわめきを押し寄せてくる。

「いやだ。」ウルは群衆に向かうガナクスから距離をとり、小さく呟いた。

「ここまで来て、街に入らないのか。」隣を歩いていたはずの少女が、何時の間にか後方に下がっていた。

「気分、が悪い、ここは、澱んでいる。」ウルは切れぎれに話す。苦しそうだった。

「馴れる。」ガナクスはウルに近寄ってその腕を掴んだ。少し力を入れて引つ張ると、大した抵抗もなく少女は引きずられる。

門が近付き、ガヤガヤと声が大きくなる。人込みにガナクスが入る。ウルもまた繋がれた手のせいでズルズルと入り込む。澱みが増す。むせるような人の臭い、辺りをさまよう無数の視線、ざわめきにある好意や悪意の声。それら全てが入り混じり、澱みとなる。

「ちつ、何時もはここまで混んでないが、日が悪かったみたいだな。」ガナクスは舌打ちする。ウルの色が悪く、予想外のことだ。人にあてられただけで体調を崩すとは、ガナクスには理解できないことだった。

足早に門をくぐる時、出入りを見張る守衛がじろりとガナクスを見た。顔を覚えられているのだろう。ガナクスは仕事で何度もこの街を訪れていた。数少ない知り合いがいる位だから、縁が深い。だからといって、人に歓迎されることがないのは兵士の視線で思い知らされる。

「宿を取る。アンタはそこで休んでろ。」人込みを抜けて、ガナクスは街中を迷わず歩く。ウルは頭を下げ、覚束ない足取りになっていた。

「すまない、手を煩わせて。」ボロの宿を借り、その寝台に腰掛けたウルが謝る。「それに宿代も私は払えない。」ウルはすまなそうにガナクスに告げる。

「仕事の報酬の内だ。気にするな。」途端にウル表情が固くなる。悩むのは勝手だが、最早ガナクスにとって決定事項になっていた。はっきりとした返事はもらってないが、こうして街に来た以上了承しているのだろう。その証拠に、ウルは何も言わない。

「俺はこれから外に出るが、アンタはここで休んでるか？」ガナクスがちらっとドアの方へ目を遣る。意識がもう外へ向いていた。

「ああ、そうさせてもらう。」ウルはごろりと横になる。街は人で溢れかえっている。ウルにはそれが苦痛だった。人間の世界、そこにはたして馴染めるのか？ウルには分からなかった。

ボタン

ドアの閉まる音に、フウーっと息をつきウルは目を閉じた。

ガナクスは宿を出て知り合いの元へ向かう。街ともなれば亜人の交流も盛んになる。常に人の目はあるもののガナクス等の力を恐れて、そう人間達は口出ししてこない。

一軒の家に着く。石造りの家は小さくともどっしりと客を迎える。コンコンとドアを叩き返事を待つ。

「何だお前か。」キィっとドアが開き、出迎えた銀色の髪の男が、金の瞳を細める。

「そういうなシーマ。面白い奴を紹介してやる。」ガナクスはニヤリとあの獰猛な笑みを浮かべた。

「私も暇ではない。」冷たい光りの金の瞳がガナクスを睨む。この良からぬ友人はシーマにとって、煩わしい者の一人だ。胸にしまい込んだ、狂暴な感情を掻き立てられる。ガナクスの獣性に影響を受け眠らせている亜人の力が起きだすのだ。特に最近は、自制するのが困難になってきている。

「ふん、わざわざ来てやったのに非道い奴だ。あの亜人の娘もお前なら気を許すだろうに。」娘？シーマは驚き隠さない。

「お前の好みは熟れた女だと思っていたが……。」「シーマが嫌そうな顔になる。

「安心しろ、俺の好みは変わってない。話の娘は俺が雇う事にしたパートナーだ。」不機嫌になったガナクスがシーマに凄みを効かす。

シーマは釈然としない様子だ。

「邪魔して悪かったな。」ガナクスが踵を返した。

「待て、折角誘ってくれたんだ。会いにいかせてもらおうよ。」シーマが、家に鍵を掛けガナクスに並ぶ。

「暇じゃないんだろう。」ガナクスは嫌みを込めて言った。

「お前が雇うという娘に興味がでた。少しばかり時間を割いても問題ない。」はっ、とガナクスが笑う。シーマも調子のいい奴だ。

「そうかい。まあお前さんも気に入るだろうよ。」金の瞳の疑念の目を、鬱陶しく思いながら言ってしまった。

街2

シーマを連れだしたガナクスが、宿のドアをノックする。・・・返事はない。何度かノックを繰り返すが、反応がないのでドアノブを回した。

ドアは無用心な事に、何の抵抗もなく開かれる。鍵が掛けられていなかった。鍵自体はガナクスが持っていたが、無論部屋の内側からも鍵は掛けられる。ガナクスは不満気に唸った。

中に入ると、少女はベッドで眠っていた。ガナクスが出ていってすぐに、そのまま寝入ったらしい。

「これがお前のパートナーか？」シーマは小声になりながら、呆れた声を出す。とても大人とは呼べない、幼いとさえ言える姿がそこにあつた。

「見た目で判断するな、この娘も亜人だ。名はウル、面白い力を使う。」

シーマの渋い反応に、ガナクスがギロリと眼光を飛ばし金の瞳と搦ち合わせる。けれどシーマの表情から読み取れるものに、ガナクスは目を細めた。彼は呆れた風ではあるが、その目に興味の色を踊らせている。

やはりな、ガナクスは確信した。獣も魔物も、そして亜人にさえもウルは何等かの影響を及ぼしている。何時もは淡白なシーマが、じつと彼女から目を離さない。この俺も、・・・そうなのだろう。

二人はベッドの傍に寄った。ウルは薄い布団を胸まで掛け、穏やかな顔で眠っている。

「この光りは？」近付いてシーマが気付く。窓が一つしかない薄暗い部屋で、微かにウルの体が白光を漏らしていた。

そろりと手を伸ばす。ガナクスが遮る間もなく、肩に触れた。

パチリと黒瞳が開く。その瞳にも、青白い光がぼうつと灯り揺らめいている。

「アナタは誰だ。」数度の瞬きをして、不思議そうに見知らぬ男、シーマに聞く。それから横にいる機嫌の悪そうなガナクスに怪訝な顔を向けた。

「私は、シーマ。ガナクスの知り合いだ。」知らず男は微笑む。ウルはシーマと名乗る男に視線を戻し、じいっと顔を見た。それからウルは、少し悲しそうな顔になって

「よろしく、シーマ。」

と、

名を呼んだ。

街3

夜が闇を寄越した。部屋が暗くなり、ウルの体光がぼくと明るくなる。しかし、部屋を照らすには光量が足りず、ガナクスが備え付けの燭台にマツチを擦って火をつけた。

シーマが部屋に一つあった椅子に座ると、ガナクスは燭台を壁に掛けてその横に立つ。蠟燭の明かりが傭兵の横顔を赤く照らし顔の影を濃くした。

「それでだ、コイツにも俺達の仕事を受けてもらう。」顎をシーマに向けて示し、ガナクスが喋り始めた。

「勝手な事を・・・。」シーマが鋭く傭兵を睨む。ガナクスとの付き合いは短くなく、彼としては予想の範囲にあったことだったが不快さは隠さない。

「はっ、いいものが見れたろう？俺だけじゃコイツの面倒はみれん。」シーマに対するガナクスの言葉は、一切気を遣う様子がない。

「・・・。」黙ったまま、なおも銀髪の男は傭兵を睨む。

「これから受ける仕事は隊商の護衛になる。積み荷にもよるが、比較的危険は少ない。大人数だから多少の事にはすぐ対処できる。ウルは今回お荷物だが、しっかり俺の仕事を覚えておけ。」シーマを無視して、ガナクスはざらりと光る目をウルに向けた。少し凄むだけでも凶悪な顔つきになる。

「分かった。シーマ・・は、来るのか？」頷いたウルは押し黙る男に話し掛けた。すると、シーマは険しくしていた目を和らげウルの方を見た。

「ああ、私も行こう。この男に言われてというのは気に喰わんがな。」その答えにウルはシーマに微笑み、よろしくと言った。

「よろしく、ウル。」

二人をみてガナクスは満足気に笑う。目論み通りの運びになった。これ以後は馴染みの依頼人から仕事を取るだけだ。

「仕事が入ったら連絡する。」ガナクスが話しを締めた。シーマが部屋から出る。ボタンとドアが閉じた。

部屋から出たシーマが頭を振る。目を閉じたら瞼の裏に白い光がちらついた。あの光をいつまでも見ていたかった。身体にのしかかる重圧が解けるような、そんな気がして・・、いやそれ以上に、自分自身を取り戻したかのような不可思議な思いが心の奥底から湧き上がったのだった。

「・・・、ガナクスこの街には亜人がいっぱい居るのか？」

「居るさ。人間に比べりゃ少ないがな。」

「そうか・・・。」

やがて寝息が聞こえた。ガナクスが含み笑いを漏らす。シーマの奴

があっさり承諾しやがった。

「面白い……。なあウルよ、久々だぜ？こんなに可笑しいのはよ。」
クツクツと笑いガナクスも目を閉じた。

街4

ガナクスが通りを歩くと、周囲の人波が割れる。ウルはその隣を歩き、好奇の視線を感じとっていた。

ひそひそ話がそこかしこで囁かれる。街を巡回する警備兵も、厳しい視線を寄越すだけで決して近付いては来ない。

「ガナクスはこの街で何かしたのか？」

ウルは思わず問い掛けた。道行く人の視線が痛い。

「牢にぶち込まれかけた時に、軽く奴等を捻っただけだ。」ガナクスは少しも表情を変えない。牢に入れられそうになった経緯をウルは聞かなかった。

遠巻きな人々から軽い悲鳴があがる。群集を分けて、のそりと全身が黄色がかった亜人が姿を現す。肌をよくみると、表面が角質めいている。

「よう、ガナクス。そちらの連れは何だ？」ガナクスが足を止めた。男の茶色の瞳はガタイに反して優し気だ。

「私はウル。ガナクスの仕事を手伝うことになっている。」黄色の男を見上げる。

「ほう、コイツの仕事？無茶はすんなよ。」ゴツゴツした手が少女の頭へ伸ばされる。指の爪が黒く、鋭く尖っていた。

「子供扱いはするなファルン。」ガナクスはウルを撫でる男へ言う。

「へっ、餓鬼は餓鬼だろ。てめえこそコイツに何やらさせる気だ。」
ファルンが手を下げ、きつい声で傭兵に問う。

「私は子供ではないよ。合意の上で仕事を手伝うんだ。」黒い瞳を
ひたとファルンに合わせ、ウルは話す。

「何もコイツの仕事を手伝う事はないだろう。俺の所で亜人向けの
仕事を紹介している。アンタ向きのも探せばあるさ。」ファルンは
困った顔を作る。傭兵にこの少女は騙されているのだと踏んでいた。

「ウルの方はコチラ向きだ。アンタの立ち入る問題じゃない。」ガ
ナクスはウルとファルンの会話を遮る。

「仕事を紹介してやってるのにその言い草か。」ファルンが不快気
に言った。

「それがお前の仕事だろう。」ガナクスは、はっと笑う。

「アナタが仕事を紹介しているのか？」険悪な雰囲気か二人の間を
漂う。ウルはファルンが仕事を紹介している事に驚いた。

「そうだ。人間は俺達を避けるが、奴らには荷が重い仕事があるか
らな。そういった案件を内で信認した亜人に任せるのさ。」荷が重
い、つまり人の嫌がる危険な仕事か押し付けられているのだ。

「仲介料は払っている。ファルン、余計な口出しはするな。」ファ
ルンが口を曲げて歩き出す。ガナクスがそれに続いた。

「何処へ？」ウルが一拍遅れてついていく。

「紹介所だ。」ガナクスはのしのしと歩く。段々と人通りがまばらになっていった。それと共に巡回兵の姿が目につくようになる。

人と擦れ違う。亜人だった。

通りでたむろする鎧を着た男達、ガナクスがそちらに手を上げる。男達が振り返す。あれは人間だ。ご同輩なのだろう。

ファルンが大きな建物の前で足を止めた。入口は馬が余裕で入れそうな程大きな作りになっている。

ファルンが両開きの扉を開くと戸についた鈴が、カランと濁いた音を立てた。

紹介所

ざわざわと声がする。十数人の人影が部屋の中にあつた。人にあらざる体色の者、角のついた者、ぱつと見では人とそう変わらない者・、そこは亜人の巢のようだった。中には緋色の髪をした人もいて、その後ろ姿を見たウルはどきりとした。

「おお、ガナクスじゃねえか。久しぶりだなあ。」壁一面を覆う木板から顔を離し、馬面の男が傭兵に声を掛けた。木板にはびっしり用紙が貼られている。

「元気そうだなバロウ。」ガナクスがそう言うと、馬面の男はふさふさとした鬚のような頭髪を振るう。

「そうでもねえよ。心に隙間風邪が吹いていまにもぶっ倒れそうだ。

「大袈裟な身振りで顔に手をあてる。ウルはその様子を訝しんだ。

「女にでも逃げられたか？」それにバロウが齒を剥く。

「なお悪い、あの逃げた女、あのアバズレは金持っていきやがった。

「大きな声を出し、憤慨するバロウを周りで聞いていた亜人達が笑う。

「あまり騒ぐんじゃねえバロウ。ここは酒場じゃない。」窓口に入つていったファルンが、古びた木椅子に腰を落ち着け男に怒鳴る。

「旦那は分かってくれねえなあ、この俺の気持ち。」バロウはニタニタ笑い、木板に顔を戻した。

「気にするな、ああいう奴だ。」ガナクスが親指をバロウに向けて指す。目を丸くしていたウルは、曖昧に頷いた。

「ウル、こつちへ来い。手続きしてやる。」ファルンが招く。ガナクスの方はバロウと並び木板を睨む。

「文字は書けるか？」ウルは首を振った。

「なら俺が書こう。」ファルンがインク壺の蓋を取り、ペン先を濡らす。

「名前は・・・」

「ウル。」

「出身地に年齢と、特技があるなら。」

「オールドウル山脈から来た。年齢は多分・・・15だ。特技はない。」

「ファルンが用紙の欄に文字を埋める。」

「身体的特徴についてだが、黒髪黒目白色の肌でいいな？他に特筆する点はあるか？」ファルンがじっとウルを観察している。

「暗い所だと体が発光するかな・・・。」聞いたファルンはクイツと片眉を上げて目を用紙に落とし、続きを書き終えた。

インクが乾くと、ファルンは用紙を持って窓口の奥の小部屋に引込む。けれどすぐに戻って来て椅子に座り直すと、手に持っていた

木切れをウルに渡した。

ウルは貰った木切れを見る。馬の彫り物があり、その下に文字が書かれていた。

「その彫り物の形でこの紹介所で作られた身分証だと分かるようになってる。書かれている数字はお前の登録番号だ。無くすなよ。」
ファルンが説明を始める。

「10の依頼を成功させるまでは仮登録扱いだ。仲介料はまだいらんが、仕事は選べん。10の依頼が達成されることで初めて仕事を選ぶことができるようになる。本登録後は証明情報が他の紹介所にも行くから、ここでなくとも依頼が受けれるようになるぞ。」
ファルンが言葉を切った。これで一通りの手続きは終わりのようだ。

「ガナクスの受ける依頼を手伝う事はできないのか？」
「仕事を選べないのなら、ウルが傭兵に手を貸すことはできない。」

「依頼を受けるのは俺とシーマだ。」
「何時の間にかガナクスが用紙を手に、ウルの隣に来ていた。」

「俺が個人的にウルを雇うなら何の問題もない。そうだろ？」
「ガナクスがファルンに用紙を差し出す。」

「分け前は減るだろうが、そこはあんたらの自由だよ。」
「ファルンが受け取った用紙に目を通した。」

「銀貨1人3枚だ。」
「依頼の仲介料を要求した。ガナクスが腰の巾着から硬貨を6枚取り出して、台の上に置く。」

「報酬は2人で白銀貨20枚。前払で先に8枚だ。」
「今度はファル

ンが硬貨を台にのせた。ガナクスがそれを腰の巾着に入れる。

「この受注は丁度あんたらでメ切りだな。依頼人に連絡を取るから、また明日ここに来てくれ。」

話が終わり、2人は紹介所から出る。ガナクスは機嫌がいいようだった。

「詳細な話は明日聞くだろう。」ガナクスは依頼の内容をこの場で説明する気がないようだった。

「分かった。」ウルも聞く気はなく、宿への道を辿る。ファルンの説明を聞いて少し疲れたようだ。

「先に戻ってる。シーマと話してくる。」ガナクスが三叉路で宿とは反対方向に曲がる。

歩くウルはつらつらと紹介所の亜人達の事を考える。それにとともに、心に期待が膨らんでいくのを感じていた。

街中にて

日がまだ高い。街中は賑わい、騒がしく人が横行する。宿へと足を急がせるが、遮る人の波に足が止まる。怪訝そうな人の目が横切っていた。

気分が悪くなっていく。人が密集し、埃っぽい空気が辺りを漂う。昨日の今日で、新鮮な森の空気が懐かしくなる。

馴れない人込みにウルは勢いよく人にぶつかった。

「つつ。」

「すまない。」青年が振り返りざまよろけたウルに謝る。そしてその縦に伸びた瞳孔が彼女を正面から見据えると、ぎゅっと細くなる。

「こちらこそごめん。」凝視する青年に謝り返す。ぶつかったのはウルだったので申し訳なく視線を下げていた。

青年が唐突に距離を縮める。ウルの反応が遅れた。

胸倉を掴まれ呼吸が苦しくなる。

「何だ！？何なんだお前。」青年の目が鋭くウルを睨む。体が地面から離れた。宙にぶら下げられる形になり苦しさが増す。

「亜人・・・だ！君と同じ。」ウルが声を絞り出す。青年の顔が一瞬

憎悪に歪んだが、その手を離した。

「ゲホっ、ゲホ。」息を深く吸い、咳込む。涙に滲む目をキツと青年に向ける。

「っ、・・・すまなかった。」口では謝ったものの攻撃的な態度は崩さない。警戒しながらウルは後退る。ある程度距離を取ると、駆け足でその場を離れた。

ウルのを背を青年の目が追う。憎悪と渴望を混ぜた顔は、少女の姿が人に紛れて消えるまで離れなかった。

宿屋に着きほつと息をついた。

「いけない・・・。」気を引き締めなければ。ここは人の街だった。ウルにとっては何が起こるか分からない未知の領域。

別れ際に渡された部屋の鍵を取り出し、部屋のドアを開く。それからしつかり内側の鍵を掛けた。ガナクスに嚴重に注意されたことだ。人の中で暮らす為の常識がウルにはない。ガナクスは鍵の存在を知らないウルの無知に暫く唸っていたが、やがて口を開くとおいおい教えてやると言われた。

ベッドの上に寝転がり、天井の木目を眺める。さっきの青年の姿が浮かぶ。同じ亜人であっても好意を向けられるわけではない。分かっていたことではあるが、ウルにはそれが寂しく感じられる。期待と不安がないまぜになり苦しくなった。次に浮かぶのは朱色の少女。鮮烈な記憶が蘇る。穏やかに微笑む顔、優しく名を呼ぶ声。服の内ポケットから赤い石を取り出して、手の平に握った。

「暖かい。」言葉を教え、温もりを与えてくれた。前を見据える緋色の瞳。

「ここは、人も亜人もいる。」石に語り掛ける。

「共存しているんだ。」ウルが笑う。この街には希望があった。あの村で失くしてしまったウルの望み。

いまだ人に馴れることのできない亜人の少女は、決意を新たにした。

街中にて（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。拙い文章ながら、精進して参ります。

依頼

「ガナクスさんと、あちらがシーマさんですね。」紹介所に入るなり大きな声が聞こえた。身なりのいい男が始終ニコニコしながら立っている。細い目をした恰幅のいい男だ。声に張りがあり広く造られている紹介所の中でも、よく通る声をしていた。隣にはファルンがいて顔をこちらに向けている。

ガナクスは男の方へ向かい早速話を始めた。シーマとウルはその後ろに立ち、話を聞く。隣にいたファルンは片手を少し上げてウル達に挨拶すると、その場を離れた。

「どうもブラットさん、この度は俺とこの男が隊商の護衛を務めさせてもらうことになった。」ガナクスがシーマを指し話す。恰幅のいい男は、ガナクスからシーマに目を移し、一度頷いた。その時ちらりと細い目がウルを見る。しかし、すぐに顔をガナクス達の方へ戻した。

「はい、分かりました。その方がシーマさんですね。よろしくお願ひします。」男がシーマに体を向け、手を差し出す。シーマもまた手を差し出して軽く握り返した。

「当方は絨毯、毛織物を扱っているのです、火気系の特殊な力を使う場合は気をつけて頂きます。」男が仕事の契約内容について話し始める。初見であるシーマに、特に目が向けられた。

「俺達が持つ技能は剣技、武術系だ。そこら辺は心配ない。」ガナクスが依頼人に答える。能力的に制約のない依頼を受けていたのだ。ブラットというこの絨毯商の依頼を以前にも二、三度ガナクスは受

けている。その為大体の依頼内容について勝手が分かっていた。

「ああ、そうですか。それなら貴方達には荷車の傍をお任せしたい。
」男が声を高めた。その様子を見るに、どうやら他に依頼を受けた者達は火気系の能力を持っていたようだ。

「道程は七日を予定しています。予定外に日数が伸びる場合は、一日につき一人銀貨五枚手当てを付けましょう。」ガナクスが頷く。

「食事の用意はありますが、寝所はそちらでご用意ください。出発は二日後の朝、南の門からです。初めの鐘が鳴ってから、遅くとも次の鐘が鳴るまでには出発したいので、よろしくお願いしますよ。」男が話を切った。

「責任を持って守らせてもらう。」ガナクスは作り笑いを浮かべた。
「ええ、お願いします。・・・してそちらの者は？」男がウルを見た。始終浮かべていた笑顔はウルの目に少し歪んでいるように見えた。

「俺が個人的に雇っている者だ。」聞いた男の細い目が笑顔を崩さず鋭くなる。

「困りますね。勝手に人が増えるとなると。」男の声が猫撫で声に変わった。

「悪かった。これは半人前で紹介所の承認をまだ受けていない。これの身の保証は俺がする。」男は少し考えたようだが、パンツと手を打つ。

「分かりました。同行することは許します。ただその者の不手際で損失が出た場合抗議させてもらいますよ。」

「了承した。」

男がパンパンと手を叩く。紹介所の壁に立っていた二人のガタイのいい男が、すぐにブラットの両側を挟むように立つ。

「ではまた。」男が出ていった。

「案外すんなりいったな。」シーマがガナクスに話し掛けた。

「ファルンの顔が立っているんだろ。いけ好かない奴だが、人間共に信用があるからな。」ウルが首を黄色い亜人の方に動かす。ファルンは窓口に座り、びくびくしている人間から話を聞いていた。依頼の持ち込みだろうか。

「仕方あるまい、奴のやり方を受け入れたのは私達だ。ここはマシな方だしな。」シーマが酷白に笑う。ウルがそれにゾクツとした。これが彼の本来の笑い方なのだろうか。自然な笑みを浮かべているのに、牙を剥いた獣の前にいるように感じられる。

「仕事をするには都合がいい・・・、それだけは感謝してるぜ。」

「何の話をしているんだ？」ウルが口を挟む。話の流れがよく見えなかった。それに会話の中に何か含みがあるのが気になった。

「仕事の話しだ。」ガナクスの言い方に濁されたとウルは思う。聞

いても答えてくれそうにない。シーマも同様の気配だ。

「その内分かる。」ただ一言シーマがいった。その金色の瞳の中に揺らめくものがある。ウルにはソレが何なのか正体が掴めなかった。

仕事の前に

「ウル、こちらへ。」

紹介所の外に出たウルを、シーマが呼び留めた。

前を歩いてきたガナクスが、立ち止まったウルの背を押す。よろけそうになり抗議しようとウルが振り返ると、ガナクスが追い払うような仕草をみせた。ふっと息を着き、ウルはシーマの傍に寄る。

「何だ？シーマ。」ウルがシーマの顔を見上げた。

「お前の防具を揃えなければならない。」シーマはウルに合わせ、少し前屈みになる。

「防具？ああ、ガナクスの着ているようなものか。」ガナクスは胸や足に金属製の鎧を着けていた。ウルの方は獣の皮を縫い合わせた、不格好な服を着ているだけだ。

「その服では刃物を防げない。急所だけでも革鎧で覆わなければ。」シーマが心臓の辺りを指す。

「シーマは？私より身軽な服じゃないか。」シーマは薄い布地のシヤツとズボンを履いている。

「私の分は家に保管してある。街では必要ないからな。」街の中をスルスルとシーマが歩く。歩幅が合わず、ウルは早足でその後を追う。

前を歩くシーマは遅れたウルを、時々立ち止まって待った。

二、三度それを繰り返した所で、シーマは完全に立ち止まった。顔が店の方を向いている。店には錆びた剣や木製の盾、凹んだ鎧が棚から溢れるように積まれていた。

二人がそうして店の前に暫く立っていると、中から腰の曲がった老人が出てきた。

「あんたか。」しゃがれ声で老人がシーマに話し掛けた。

「彼女に合う、鎧が欲しい。なるべく軽いものを仕立ててやってくれ。」ウルを肩を掴み、老人の前へ突き出す。

「いくら出せる。」老人の目の片方が、白く濁っておりウルを睨みつけた。

「白銀貨15枚。」シーマが述べた言葉にウルはビクツと反応した。

「シーマ！そんな金額……。」貨幣の価値に疎くとも、少ないとはいえない額だとウルは学習していた。

「何、つけにしておく。」冷酷な笑みがシーマの顔に貼付いている。人を不安にさせるような表情だ。

「お前さんに少女趣味があったとは意外じゃよ。」横目で見ていた老人の馬鹿にした声で、ウルは顔をシーマから離れた。

「心配ない。防具を揃えるには安い程だ。あんた亜人じゃろ？すぐ稼げるさ。」老人がベタベタとウルを触り始めた。ウルが

ひよいと顔をシーマに戻せば、にっこりと笑い金の瞳を意地悪気に踊らせている。意外と性格が悪いのかもしれない。

「私は子供ではない、大人だ。金は必ず返すよ、シーマ。」傷のある鎧をあてがわれながら、二人に向けて言う。とても偉そうなことを言える立場ではないが、腹が立った。

「そうかい、そりやすまなんだ。」カチリと何かが噛み合う音がした。

「これでいいじゃろ。」胸の他に腕と足に革製の鎧が着付けられていた。所々傷が目立つが、体を捻っても動きの邪魔にはならない。

「よいかな。」二人に異論はなかった。

商隊

朝を告げる鶏の声。荷を纏める傭兵の物を探る音。日の光が僅かに差し込み、ウル顔に当たった。

ゆっくりと瞼を開け、ベッドから半身を起す。

「起きたか。」傭兵が動きを止めた。シンと朝の静けさが戻る。

「おはよう。」目を擦りベッドから降りた。そのまま体を伸ばして筋肉をほぐす。

「この荷物を纏めたら出る。アンタも忘れ物がないようにしろ。」ガナクスが荷の紐をキュツと閉めた。

ウルは床に置いた革鎧を手取る。それから体に当て、留め具を掛けようとしたがうまくいかない。

「時間が掛かったな。」ウルが着付けを終えるまで、傭兵はその様子を見ていた。

「…すまない。」ガナクスのニヤツと小馬鹿にした表情は好かないが、待たせたのは間違いない。

「行くぞ。」二人は宿を出た。

薄もやの掛かる街。遠くに聞こえる朝鳴き鳥の声。

銀色の髪の方が、褪せた緑色のコートに身を包み待っていた。

「早えじゃねえか。」

「それ程でもないだろう。次期、鐘が鳴る。」シーマはガナクスに並び歩く。

人の起き出す気配はまだ感じられない。なのに次にはシーマの言う通り、ゴォーンと盛大な音を鐘が立てた。

家並みが途切れ、南の門が見えて来る。門の前は開けた場所に作られていて、荷馬車が5台止まっていても全く問題ない広さがあった。そこには既に忙しそうに働く使用人の姿と、十数人の傭兵らしき者の姿があった。

使用人にあれこれ指示を出していた男が、ふいにこちらを見た。

「おはようございます。これで全員ですね。」声を張り上げてブラットが言った。

「お前達、もたもたするんじゃない。さっさと品の確認をするんだ。」その場の人数の確認をするやいなや、使用人をせき立てる。使用人があたふたとブラットの傍に走り寄り、何か話し出した。

「ええ、分かりました。終わっただんですね。よろしい、出発しましょう。」ブラットが使用人との話しを終えた。

「皆さん、お待たせ致しました。さあ、出発しましょう。紹介所の方は各自先頭に五人、中辺りに四人、最後尾に五人といった形で荷を守って下さい。後々の調整はそちらにお任せします。」使用人が

荷馬車に乗る。傭兵達も各自バラけてその周りを固めた。

「シーマは中辺りに、俺とウルは先頭だ。」早く到着した者から優先的に場所を選んでいった。ガナクス達は最後に来たので、空いている場所に入るしかなかった。

「いいですね。行きますよ。」ブラットが馬に乗って、全員の用意を確認する。

「出発です。」南の門を商隊の一行が通り抜けた。門衛がそれを見送る。

「いいかウル、絶対に一人では行動するなよ。」

ガナクスは歩き出したウルにそれだけ言うとは後は黙った。荷馬車に徒歩について行かなくてはならないのだ。ウルもまた他の傭兵達のように黙り、ただ足を動かした。

商隊 2

ゼエゼエと肺が苦し気に息を取り込み押し出す。荷馬車の速度はついていけなくはないものの、一時間もすれば体が悲鳴を上げ出す程には速かった。ウルはガナクスの後ろにつき、なるべく呼吸が荒くならないように体を動かす。

ガナクスがちらりと後ろを見た。ウルが息を乱しているのが見て取れる。それから太陽に目を向けその位置を見た。真上に来るまでまだ三時間は掛かるだろう。

前へ顔を戻す。助け等しない。倒れたらまあ担がない事もないが、ついてこれるのなら手出しの必要はないだろうとガナクスは考えている。彼女は飽くまでもパートナーであり、新米の教育といったものを施す気はさらさらなかった。

結局ウルは昼の休みまで倒れずついて来た。しかしその様子に驚いたのはシーマだ。ウルが地面に横たわり荒い息を整えているのを見ると、非難の目をガナクスへ送る。

「どうして助けてやらない？」小声でガナクスに詰問する。

「必要ないだろ。ここまでついて来ている。」対してガナクスは鬱陶しそうだ。

「今日だけではない、この様子では三日と持たないだろう。」シーマが険しい顔で言った。ウルは午前だけで疲労がかなり溜まっている。

「その時はその時だ。なあに、そんな柔な奴じゃない。」何しろウルは山で暮らしていた。それを考慮すると、心配する必要などない。ウルが苦しい思いをしようと、ガナクスの知ったことではなかった。

「ウル、午後からは私の後へつけ。きつくなったらお前を背負ってやる。」息を整え、体を起こしたウルにシーマが言った。

「ありがとうシーマ。けど、いいよ。ついていけない事はないから。役には立たないだろうけどね。」ウルがそう言って立つと辺りを見回す。

亜人達が配られた昼食を食べていた。その傍にウルは寄り観察する。皆、鱗を生やしたり人には些か多い毛を生やしていたりと、奇異な身体を持っている。

「何だ？飯ならあそこに立っている使用人がくれる。用がないなら去れ。」それを見咎めた赤い角を額に生やす亜人がウルにきつく言う。彼等はウルのような一見人間に見える者を嫌っていた。

「分かった。ありがとう。」ウルはただ亜人達の様子を見ていただけだが、それに気分を害したらしい亜人にお礼を言っただがることにした。

それを一人が呼びとめる。

「待て、こっちへ来い。」熊のような面相の大男だ。手招く手も大きな鉤爪があり、口からは猛獣のような大きな牙が見える。もう人と呼べる部分が少なかった。

ウルがそろそろと寄る。その頭を大男が撫でた。

「嬢ちゃんのような人にはきついだろう。」その声には同情が籠っている。見かけによらず優しい性質のようだ。

「はい……。きついけどそうも言っていたら仕事にならない。」ウルは昼飯を食べ始めたガナクス達の方を見た。

「まあ無理すんなよ。仲間を見殺しにする程俺達は鬼じゃない。それが新人ともなるとな。」大男が顔を和ませている。誰かが似合わねえと小声で言うのが聞こえた。

「引き止めて悪かったな。」大男が頭から手を離す。

「いえ、ありがとう。」ウルが笑み浮かべ礼を言った。

ウルが離れると、亜人達の間には沈黙が落ちる。大男がボソリと不思議な奴だと言った。それに誰かがそうだなと応える。その場の皆が何かを感じていたが、それは言葉にならなかった。

商隊3

休憩が終わり、商隊が動き出す。街から出て暫くは荒れた地表が続いていたが、いまは草原に景色が変わっていた。青々と草が繁り、馬や牛が遠くで群れを成している。

風が一迅吹くと、波打つように一斉に草が揺れた。穏やかな景色だ。体を動かす事に集中していても、ウルはその光景に目を奪われる。山育ちにとってそれは胸を打つものだった。ただ、足元に草の感触はない。草原を分けるように人が踏み固めた地面が露出し、太い道ができあがっていた。一行はそこを通っている。

ウルはガナクス達傭兵の仕事の様子を観察し始めた。先程休んだばかりなので、まだ少しばかり余裕があった。

ガナクスは息も乱さず走っている。そして時折辺りを見回していた。鋭い目付きで少しの音・例えば二十メートル先で鼯のような大きな生き物が一行に驚き、飛び上がってガサリと不意な音を立てた時等・すぐさまギロツと目を向け警戒する。何が起きてもいいように臨戦態勢になるのだ。それは他の傭兵連中も同じで、絶えず目の届く限りの場所に意識を向けていた。

そんな様子からウルは同じように耳をすませたり、辺りに注意を向けようとしたがすぐにきつくなりやめてしまった。ついて行くのが精一杯だ。

前しか向かずに走る。よく見ておくとガナクスは言ったが、ウルは

それすらできず情けなく思った。

ただただ前を見つめている内に視界が悪くなっていく。空が曇り、大分傾いていた太陽の光が陰る。誰かが舌打ちした。

荷馬車が止まった。

倒れたウルは放って置かれ、商人が泊まりの準備を始める。亜人達は一ヶ所に集まりなにやら話し合っていた。

「ウル。」寝てしまっていたのか、もうろうつとした意識がその声で覚めた。シーマが屈み込み、ウルの顔を覗いている。

「眠るなら薪の近くにしろ。それとほら、お前の分だ。」顎で焚かれた薪の方を示す。ウルがのろのろと立ち上がると、その手に干肉と固いパンを持たせた。

空が雲に覆われ星さえ見えず闇夜に近い。ウルの白く光る姿がよく目立った。火の周りに幾人か亜人が座り、近付いてくるウルを見ている。

「その光りは火か？」隣に座ったウルから距離を取り亜人が問う。

「違う。」ウルは否定する。

「なら雷か？」別の亜人が言った。好奇心を刺激されたようだ。

「いや、これは単なる明かりだ。」手を火の方へかざす。体が冷え

ていた。

「光り苔の傍で産まれたのか？」距離を取っていた亜人が半分本気で言う。

「それは分からないな、覚えてないから。」

「そうか。」妙な空気になる。亜人の出地は似たり寄ったりだ。同情はしないが、自らの生まれに何かしら思う所はあった。

亜人の力は母親の胎内にいた時に決まる。雷鳴のよく鳴る晩や暖炉の火の傍、生い茂る草木や獣の骨肉。なぜ亜人になるかは分からない。周囲にある何かしらの影響で、突然生まれるのがほとんどだった。

そして、生まれ落ちると共に疎まれ、すぐさま売られるか捨てられる。場合によっては母子共々に殺されるのが常だった。

亜人の一人が歌い出す。鳥のようなトサカを頭に生やしていた。

「翼は青く・・・手を失った・・・その背の翼は空を打ち・・・彼は空を駆けて行く・・・その心臓に矢が刺さるまで・・・飛ぶ飛ぶ彼は・・・青い翼で」

「辛気臭いなぜオ、しかもお前、鶏の癖によう。」赤い目の男が文句を言った。

「何！私は鶏ではない。撤回したまえ。」歌った男がむすりとした。

「眠るのに丁度いいのを歌えよ。俺の見張りの番は明け方に近いんだ。」ウルの隣に座り直した男がゼオに言う。

「ふん。・・・夜に流れる星の尾よ・・・果てない銀河を行く者よ・・・
夢の間に瞬く・・・星は流れる・・・我等と共に」

ゼオという亜人の声は快く、歌も下手ではなかった。深く心地いい
眠りにウルは落ちていった。

商隊4（前書き）

戦闘描写あります。

商隊4

高い遠吠えの声に荷馬車が止まる。街を出て三日、雨に降られ泥塗れになったりもしたが戦闘はなかった。

「前からか。」熊のような亜人が背中に掛けた斧を手に取る。

遠吠えに怯えた馬を、御者台の使用人が強張った顔で抑えた。

草原地帯が終わり、地面は硬い岩盤に変わっていた。所々に林が生えるだけの淋しい場所だ。なので、迫って来る獣の群れがよく見えた。

ガナクス達が武器を構え、前に進み出る。中段にいた亜人の内の人人が上がって来て、ガナクス達の代わりに先頭の荷馬車を守るように立つ。

ウルはガナクスの後を追う。

十数頭の狼に似た獣の群れが、ガナクス達の前で立ち止まり唸り声を上げていた。敵意に目をぎらつかせているが、武器を構えた亜人を警戒して襲ってこない。その様子に群れの中で一際大きな狼が短く唸った。

弾かれたように狼達が飛び出す。ガナクスが剣を振るった。キャーンと高い悲鳴を出し狼が下がる。足から血が流れていた。

ガナクスの背後で足を狙って噛み付こうとした狼が、蹴り飛ばされる。

一人に対し四匹の狼が襲い掛かっていた。その中でウルは立ち尽くした。

「オオオ。」ガナクスが雄叫び刃を狼の胸に落とす。鮮血が吹き出し、地面に血溜まりを造る。怯んだ狼達が距離を取る。熊のような亜人が笑う。足元に首のない狼が二匹転がっていた。

何ができるといふんだ。

体がフラフラとする。ウル顔から血の気が下がっていた。その時、あの一際大きな狼がウルに目を合わせた。その狼は黒い毛並みをしているが、顔に鼻から額まで一筋の白い毛が生えていた。獣の黒い瞳が動く。

「ああ。」か細い声が少女から漏れた。狼の群れにあってそれは異質だった。

ずっと狼の目がウルから外れる。

「ヴォオン。」狼が吠えて駆け出した。それにつられて他の狼達が後に続く。

十分もしない内に戦いは終わった。

「ガナクス・・・。」ウルが傭兵に声を掛ける。

「何だ。」ガナクスは剣についた血を布で拭いていた。

「戦わなければならないのか？あれと。」ウル顔は青ざめていた。

ガナクスと顔を合わさず目を地面に落としていた。

「クツクツクツ、戦うだと？戦いたいなら戦えばいい。」嘲笑うような声にウルがバツと顔を上げると、熱を帯びた眼光に刺される。

「それじゃ何で・・・。」急激にウルの中で不安が増していく。この傭兵が足手まといを連れる理由が分からない。

「あれは魔物だったな。」あれとは、あの大きな狼のことだろう。

「そうだな。」あの狼は魔物だった。目が合い狼が苦し気に顔を背けたのが無性に悲しかった。

「ウル、アンタが戦えるとは思っちゃいない。あの魔物はアンタを見て逃げた。それがアンタの役割だ。」ガナクスが剣を仕舞う。

ウルには役に立っているのか判然としなかったが、ただ戦わずに済むという安心感と膨らんだ不安が胸に残った。

商隊 5

「変だな。」熊のような亜人が言う。辺りはすっかり暗くなり、三人が焚火を囲み会話していた。

「何がだ。」青みのある肌の亜人が言葉を返す。

「あの狼の魔物は最近ここらで暴れている奴だ。」

「へえ、それで？」気のない返しをしながら青みの肌の亜人は焚火をいじる。

「ちゃんと聞け、サウロ。」

「聞いてるって。」その投げやりな態度に、グルルと獣のような唸り声で熊のような亜人は威嚇した。

「ちゃんと聞いた方が身の為ですよ。グルガは短気ですから。」ゼオがサウロに忠告する。

「さっさと話せよ。」サウロが心なしか小さくなった声で言った。

「あれは獲物を見つけたら、執念深く追ってくる」と聞いている。これまで八人を殺し、十数頭の牛馬がやられた。」

「それがどうしたんだ。昼間追っばらってやったろ。」サウロは青い目でグルガを見る。白目がなく真っ青だ。

「執念深いと言ったろが。夜陰に紛れて馬を狙ってくるはずだ。」

「それにしても何の気配もないし、遠吠えもない。どっかいつちま
ったんじゃねーの。」サウロはピリピリしているグルガに可笑しそ
うにしている。

「だから変なんだよ。アレは昼の戦いぐらいじゃ引かないはずだ。
群れが全滅してただアレ一匹残った時さえ、油断した旅人の腕と馬
を食ったそうさ。それも夜にな。」

「本当かよ。」サウロが頬を引き攣らせ、腰の剣の柄を撫でた。

ウルは酷使している体の痛みを我慢して薪になりそうな枝を集めて
いた。辺り一帯に岩盤が続き、燃えそうなものを見つけるにも苦勞
している。ガナクス達は傍にいない。ウルの歩く音が寂しく響く。

カツンと小石が転がる音がした。ウルが音のした方を向くと、影が
ズラリと並んでいた。

真ん中の大きな影が動く。真つ黒な中に、一筋の白い線が見える。
タツタツと歩く音をさせるだけで、一切の音を群れの狼も向かって
くる魔物も立てなかった。

魔物が間近に来る。虎のような大きさで、艶のある黒い毛は魔物の
動きに合わせて波打つ。

「何をしに来た。」ウルは話し掛けた。言葉を解すかも分からぬ魔
物に。

じっと魔物はウルの顔を見る。ぴくぴくと耳を動かす、彼女の声を
拾っているようだった。

「私を食いに来たか？」ウルは戸惑っていた。今まで獣や魔物が自ら接触して来たことはない。

魔物が二、三步空けていた距離を更に詰めた。

鼻面をウルの下げている方の手に当てる。生暖かく湿った感触をウルは感じた。

そうして鼻を少しの間押し付けると、くるりと魔物が背を向けた。

タンツと走り出し、待ち構えていた群れを引き連れて岩場の陰に消えて行く。

ウルの前から姿を消した魔物は、裂けた口をニヤリと歪めていた。以前よりも増した理性の光りを瞳に宿して。

ウルは片手一杯の薪を持って一行の元へ帰る。抑えの効かなかった魔物を狡猾にし、更に危険な存在に変えたことも知らずに。

商隊 6

七日目の朝、上機嫌で馬の鞍に乗ったブラットが使用人、護衛達に声を掛けた。

「おはようございます皆さん。大変喜ばしい事に、今日の昼には我々はサイナに着くでしょう。街へ入ってしまったなら護衛の皆さんの仕事は終わりです。報酬はサイナの紹介所に預けますのでそのまま解散して頂く形になります。それでは出発しましょう。」

バタバタと使用人が荷馬車に乗り込む。ピシリと鞭を打ち馬を走らすと傭兵達も共に走り出した。

途中休憩を挟まず、街へ着くまで一行は走り続けた。

城塞都市のサイナはウルが初めて訪れた街、カナルと違い物々しい雰囲気も放っていた。ブラットが門を守る兵士に止められ荷を改められている。それはすぐに終わりブラット達は街への門を抜けた。

問題はその後だ。

「お前達、待て。」兵士が護衛達を引き止めた。ウルは疲れとは別の気分の悪さを覚える。人の街には纏わり付くような気配が漂う。人が発する声や熱、気分が悪くなってくる。そして明らかな敵意にも。

「その奴は魔物ではないのか。」詰問する声。兵士が指差すのはグルガだ。

色めき立つ亜人達。半端者と蔑まれ、揚句に魔物と呼ばれるとは腹に据えかねない事だった。

「何て言っただお前……。」グルガが低い声で兵士に言った。

「喋れるのか？」兵士は権威を背に、嘲笑うように言った。彼が助けを呼べば仲間がすぐに駆け付ける。

ゼオとサウロが前に出て、兵士達とグルガの間に立つ。

「我々は紹介所の認可を受けた亜人ですよ。疑うなら証を見なさい。」ゼオが言い携帯する袋から彫り物を出す。それはウルの持つ物と違い、狐らしき形をしている。

「はっ、そんな物信用できるか。怪しい者を街に入れるわけにはいかない。」亜人達が無言になる。

地響きのように唸り声が鳴る。

グルガが怒りを抑えられず興奮状態になろうとしていた。

「グルガ。」ウルはその様子に不安を覚える。まるで理性を無くしているように見えるからだ。

鼻に皺が寄り、涎れが剥いた牙から垂れた。あの狼の群れと戦っていた時も、こんな表情をしていた。

ゼオ達を押し退けグルガがその姿を兵士に見せると、ヒツと小さな悲鳴を上げた。

ウルがグルガの手を引く。ギリリと振り返ったグルガがその手を払い、ぎよっとなった。

彼の持つ鋭い爪は軽く振っただけで腕の革の鎧を裂き、下の皮膚まで傷つけた。

「痛っ……。」「血が滲む。

「君大丈夫か。」「兵士が慌ててウルに駆け寄る。亜人だと気付いてないようだ。

その兵士からウルは素早く距離を取る。兵士が怪訝な顔をした。

「通さないならそれでいい。私はカナルへ帰るよ。」「ガナクスが苦い顔をする。彼としてはサイナで一休みしたかったのだ。見咎められたのはグルガただ一人、後は関係なかった。この場に居残っているのも数人の亜人達だけだ。

「嬢ちゃん、これはアンタが気にする事じゃない。ほらそちらの旦那と街に入りな。」「冷静になったグルガがウルを促す。ガナクスがグルガを見ていた。ウルは気にしていないようだが、傷付けた事実は変わらない。グルガに向けられる傭兵の目は冷たかった。

「入りたくない。私は別にこの街に行かなくなっただっていいんだ。」「

「だがよ……。」「グルガは申し訳なさそうな様子を見せる。

「私は紹介所の認可も受けていない亜人だ。街に入ったっていい事がある気しないね。」「兵士が驚く。亜人に囲まれている時点である程度予測できることであるのだが。

「お前達、何をやっている。」厳つい顔の兵士が、揉めた様子
のグルガ達に近寄って来た。

「はっ、怪しい者達がいたので審査していました！」兵士が姿勢を
正し答える。どうやら厳つい兵士の方が身分が上のようだ。

「それで問題があったのか。」

「はっ、．．．いえまだ審査中でして。」

テキパキとグルガの証を調べ、街へ立ち寄る理由を厳つい兵士が聞
き出す。

「我等の街サイナへようこそ。長く引き止めて申し訳なかった。」
あっさりと街への門を通された。あの兵士は口をへの字にしていた
が。

「悪かったな嬢ちゃん。」グルガが先程の事で謝る。

「いや、不用意に手を出したのが悪いんだ。気にしないでくれ。」

ゼオやサウロを連れてグルガが去る。人気の無い路地の方へと。

ウルは街へ目を向けた。カナルより清潔感があり、建物も上等に見
える。けれど、澱みもまた深くなっているようだった。山で育った
ウルにとって、いまだ人の街はいびつに見える。

ガナクスとシーマが先に行く。

ウルは体の疲れや傷の痛みを我慢して、黙って後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7529u/>

月影狂想曲

2011年12月19日01時47分発行